

令和4年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和4年4月19日(火)

3 対象学年 女川中学校第3学年生徒35名 当日実施生徒 30名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語，数学，理科
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	数学	理科
宮城県	若干下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)
全国	若干下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)	かなり下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・[知識及び技能]における「言葉の特徴や使い方に関する事項」(問題番号3一)では、正答率が全国の割合を大きく上回っており、表現技法の理解がなされていることがうかがえる。
- ・[思考力、判断力、表現力等]における「話すこと・聞くこと」(問題番号1三)では、正答率が全国の割合を上回っており、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現して話すことについて理解していることがうかがえる。
- ・[思考力、判断力、表現力等]における「書くこと」(問題番号2三)では、正答率が全国の割合をやや上回っており、根拠を明確にして自分の考えを書くことができています。
- ・[思考力、判断力、表現力等]における「読むこと」(問題番号3四)では、正答率が全国の割合をやや上回った。また、記述式の問題で全国の無回答率と本校を比べると、本校の無回答率が低かった。他の記述問題をみても書いて表現することにおいて全国をやや上回っており、全体的に身に付いていることがうかがえる。また、記述式の問題で無回答率が0%ということから、表現することに対して抵抗がないことがうかがえる。

(課題)

- ・[知識及び技能]における「漢字」を書く問題において(問題番号2二①, 2二②), 誤答や無回答が多く見られた。全国と宮城県の平均値にも届かず、漢字を「書くこと」に対する苦手意識

がうかがえる。

- ・[知識及び技能]における「言葉の特徴や使い方に関する事項」(問題番号2一)では、助動詞の働きについての理解が不十分で、目的に応じて使うことができないことがうかがえる。
- ・[思考力, 判断力, 表現力等]における「話すこと・聞くこと」(問題番号1二)では、全国を大きく下回っており、と顕著に乖離が見られた。論理の展開を問う内容に苦手がうかがえる。
- ・[思考力, 判断力, 表現力等]における「話すこと・聞くこと」(問題番号1一)では、条件を満たして解答することに困難を感じている。

②指導改善のポイント

- ・普段の授業の様子からも読むことを面倒だと感じ、文章から丁寧に読み取ることをしていない生徒が見受けられる。論理の展開の理解について「読むこと」においては、教科書の文章を読む際に、接続表現に着目したり、段落相互の関係性を捉えたりすることを意識させる。そして、論理的な読み方を繰り返し行い、身に付けさせていく。
- ・漢字指導は、日頃の小テストで漢字と向き合う時間を確保したり、ノート等で生徒が書いた文章を漢字に直したりと、より多くの場面で漢字を多用する機会を設けて、漢字と触れ合う時間をとっていく。
- ・設問の意図をしっかりと理解できていない生徒がいることから、言葉を正確に理解する力を更に身に付けさせていきたい。そのためにも、言葉の一つ一つに意識を向け、どのように自分の言葉で表現したら良いのかをじっくり時間をかけて取り組む場面を授業の中に取り入れていく。

③質問紙から

○学習に対する興味・関心等について

- ・国語の授業に対して「大切だ」と思っている生徒がほぼ全員である。また、国語の学習が社会に出た時に役立つと思っていると回答した生徒も多かった。つまり、国語の授業に対して肯定的な生徒が多いことがうかがえる。生徒の国語への必要感をより向上させるために、学習活動では実生活に即した場面を設定し、目的意識を持たせた授業を行っていく。
- ・ICT機器の効果的な活用について、学習のねらいを踏まえながら、活用場面を考えて授業を組み立てていく。具体的には、情報を収集して整理した内容を分かりやすく相手に表現する場面、考えたことを互いに共有し、個人の考えや学級全体の考えを深める場面などを取り入れた授業を展開していく。本校では、環境が整備されているので、活用することができる場面をより一層増やしていく。

(2) 数学の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・学習指導要領の領域の平均正答率状況において、全体的な傾向は、宮城県や全国のそれと同様の状況にあった。
- ・計算、文字式の読み取り、三角形の合同条件など、各領域における学習の基盤を問う問題の正答率は5割を超えており、学習の基盤が定着しつつある。
- ・「記述式」問題(5題)における、本校正答率、無回答率の平均はどちらもかなり低かった。

しかし、関数領域において、「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる問題」の平均正答率が、宮城県や全国のそれを大きく上回った。その一方、「説明する問題に対して、どのように解答しましたか」との質問には、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」を選択した生徒の割合は約5割であった。「あきらめた」「解答しなかった」と解答した生徒の割合は約4割であった。

(課題)

- ・学習指導要領の領域の平均正答率状況において、「図形」と「データの活用」領域において宮城県や全国の値を大きく下回った。特に、「図形」領域における正答率が大きく下回った。
- ・評価の観点において、「思考・判断・表現」の観点の平均正答率がかなり低かった。
- ・「記述式」問題における誤答率はおよそ7割と高かった。
- ・文章量、情報量が多い問題に対する誤答率や無回答率が高い。

②指導改善のポイント

- ・数学における「説明する力」と「文章力」を伸ばす指導を継続させ、力の定着を図る。そのために、「(理由・根拠)なので(考え・性質)である。」といった簡易な記述から始め、学習内容に応じて適宜文章で説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・文章が長かったり、情報量が多かったりする問題を意図的に提示し、問題解決に向けて必要な資料や情報を読み取る力を伸ばす指導を行う。
- ・図形領域において、定型の証明にあてはまらず、応用力を必要とする証明問題を、生徒の状況を踏まえながら適宜題材として扱う。
- ・習熟度別学習をこれからも実施し、学習内容の理解に努力を要する生徒への指導を継続していく。

③質問紙から

○「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について

- ・授業の導入時においては、それまでの学習内容を振り返る口頭試問や小テストを行う。また、展開の終末時においては確認問題に取り組みさせる。さらに、定期考査や単元テストの再テストを行い、知識・技能の定着を図る。
- ・教師が小学校学習指導要領を踏まえ、生徒には既習事項の復習や関連付けを行い、学び直しを推進する。
- ・問題集やA I型学習教材(キュービナ)等を用いて問題を多く解いたり、定期考査や小テストについては生徒の解答を細かく採点して自信を付けさせたりするなどの取組を継続する。
- ・授業を振り返らせ、生徒の学習と共に授業のP D C Aサイクルを確立する。

○「活用する力」の育成を図る授業の充実について

- ・計算方法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。生徒が、計算方法等を理解して覚えた後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。
- ・学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりさせる。
- ・「数学の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」に対しては否定的な回答を選んだ生徒の割合が、宮城県や全国の傾向と同様に5割を超えた。これを受け

て、数学で学んだ内容が生活で顕著に生かされている教材を授業に取り入れる。

○学習に対する興味・関心等について

- ・「数学の勉強が好き」「数学の勉強は大切」「数学の授業の内容はよく分かる」という質問事項に対して、肯定的な回答を選んだ生徒の割合は宮城県や全国のそれを全て大きく上回った。
- ・ICT 機器を活用し、問題の解釈を促すと共に、理解の深化を図る。

(3) 理科の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・学習内容の理解、定着における平均正答率の傾向は、中央値や最頻値よりも宮城県や全国の傾向と同様であった。
- ・気象の変化に関して、空の様子と天気図を関連付けて分析する問題において、全国平均をやや上回った。(地学)
- ・吸湿発熱繊維に水蒸気を多く含む空気を通した時に起こる反応についての考察では、全国平均をやや上回った(地学)
- ・節足動物の体のつくりと働きについて、生活場所や移動方法に関連付けて分析する問題において、全国平均をやや上回った。(生物)
- ・ばねの伸びる長さ、加える力の関係に対する考察を行うために、適切に処理されたグラフを選択する問題において、全国平均を若干上回った。(物理)

(課題)

- ・平均正答率は、宮城県や全国のそれを下回った。
- ・日常生活の中で、静電気を帯びる現象について、正答率が宮城県や全国平均よりも大きく下回った。(物理)
- ・記述式問題において、正答率がかなり低く、無答率も宮城県や全国平均よりも上回っている。文章力、表現力、科学的なものの考え方が劣る傾向がある。
- ・運動の法則に関する実験において、考察の妥当性を高めるための調整方法を説明する問題で、無答率が4割を超える高い数値を示した。

②指導改善のポイント

- ・理科における科学的な思考力・表現力を伸ばす指導の充実を図る。具体的には、科学的な事象について、理由や根拠を持って、その説明ができるように実験の考察を行う時間や説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・授業において、既習の学習内容を振り返る口頭試問や小テストを行い、前時の学習内容を想起させることで、本時の学習にスムーズに入れるようにし、知識・技能の定着を図る。
- ・単元ごとに確認テストを行い、個々の生徒の理解度を確かめながら、必要に応じて不足している点を補いながら授業を行う。
- ・学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりとさせる。

③質問紙から

○「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について

- ・「解答を文章などで書く問題について、どのように解答しましたか。」という質問に対して、無答率と全国平均を大きく上回った。この結果から、問題の意味を理解できていない可能性が考えられるので、問題演習の中で文章問題を多く取り入れ、文章読解力を養っていきたい。
- 「活用する力」の育成を図る授業の充実について
 - ・実験の考察において、自分の考えを言葉で表現したり、文章で表現したりできるように、文章で書く活動を取り入れる。
- 学習に対する興味・関心等について
 - ・理科の授業において、約7割の生徒が好きに当てはまる。また、理科の勉強は大切だと思うという質問に対しては、約8割の生徒が大切だと考えている。

7 生徒質問紙調査結果から（○成果、▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- ほとんどの生徒が、朝食を毎日食べて登校している。
- 毎日同じ時刻に寝ている生徒が9割近くいる。
- 毎日同じ時刻に起きている生徒が9割以上いる。
- スマートフォンやコンピュータの使い方について、4割の生徒は家族との約束を守っている。
- ゲームを行う時間、SNS・動画視聴を行う時間が1日3時間以上の生徒が半数から3～4割へと減少した。
- ▲スマートフォンやコンピュータの使い方について、約束を守っていない・決めていない生徒が4割いる。

（2）規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を6割の生徒が持っており、宮城県、全国平均をやや上回っている。
- ▲いじめについて、ほとんどの生徒が「いじめはどんな理由があってもいけないこと」と認識しているが、一部「当てはまらない」と回答した生徒がいた。
- ▲困りごとや不安を相談することを苦手としている生徒は、減少しているがまだ3割程度いる。

（3）学習に対する興味・関心等について

- ▲家庭で、平日2時間以上の学習時間を確保している生徒は3割程度、それに満たない、もしくは確保していない生徒が約7割いる（休日については、2時間以上が2割程度、それに満たないが8割近くになる）。
- ▲6割近くの生徒が、授業以外の読書を行っていない。また、4割以上の生徒が読書は嫌いと回答している。
- ▲9割近くの生徒が、新聞をほとんど読まない、または全く読まないと回答している。
- ▲計画的な学習の取組について、6割の生徒は「よくしている」もしくは「ときどきしている」と回答している。全国平均をやや上回るが、宮城県平均を下回っていることに加え、「よくしている」が1割にも満たない。

8 今後の取組

（1）「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

- ①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実

- ・宮城県教育委員会の示す「学力向上に向けた5つの提言」から、特に「めあて・振り返り」の場面設定を確実にを行い、学習意欲と学習内容の定着を図る。
- ・校内研究により、生徒に身に付けさせたい「確かな学力」を明確にし、教師が互いに授業を見合うなど、学力向上に向けた指導力の向上を目指す。

②個に応じた学習支援の充実

- ・各教科で現在進めている小テストや単元の振り返りシートなどを活用し、生徒個々の習熟度を把握し、学習課題の設定の一層の工夫をする。
- ・教科の特性により、習熟度に応じた少人数学習やティームティーチングにより、学習支援を継続していく。
- ・AI型学習教材(キュビナ)を活用し、過去の学習内容を確認したり、個に応じた振り返りや復習を行ったりする。

③ICT機器の効果的な活用

- ・生徒の苦手箇所をICT機器で置換することによって、学習への取組を阻害しているものを取り除く。
- ・小学校との連携の中で、基礎となる学習(読む、書く、聞く等)の定着と学習規律の確立を図る。

(2)学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的な生活習慣の確立

- ・生徒会を中心に進めている「スーパーうみねこルール」への取組を通して、生活のリズムを整え、健康的な生活を送ることへの意識を高めさせる。
- ・生徒会の保健・安全委員会で実践している「スマイルタイム」において、真剣な態度で臨んでいる。これを受け、自分の生活の振り返りから生活改善に結び付けながら生活習慣の確立を図る。

②自己有用感の涵養

- ・学級活動や学校行事で生徒の活躍の場を意図的に設ける。取組を通して、生徒の個性や得意なことを認めたり、生徒が自身の活躍を振り返ったりすることで、「良かった」と思うことができるようにする。
- ・生徒の希望や特性に応じた上級学校の紹介はもちろんのこと、学科や学習環境だけではなく、就職とも結び付ける。また、奨学金等の学習支援の制度などを紹介し、自分にふさわしい進路選択ができるように進路学習を進める。

③家庭学習の定着

- ・各教科の学習内容や提出課題の内容を確認し、朝の会・帰りの会等でも確認する。
- ・学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める家庭学習の方法を提示し、学習習慣の構築・定着を図る。
- ・コロナ禍に対応し、タブレットを用いたオンライン学習実施に向けて整備を進めている。

(3)女川小学校, 女川向学館, 地域との連携強化

① 小学校との連携

- ・校内研究の主題や副題, 目指す児童・生徒像を小学校・中学校で共通のものとするすることで, 9年間を見通した指導を行う。また, 定期的に小中教科部会を行い, 学習状況やその他の情

報交換を行うことで各教科の指導においても9年間を系統立てて指導する。

- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。

②女川向学館との連携

- ・放課後学習会や授業における学習支援に協力してもらおう。
- ・各種検定において、女川向学館に実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。
- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、地域の人々を中心に講師として招き、各講座の学習を進める。